7人目の住人

学校嫌い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
７人目の住人

【Ｎコード】
Ｎ３１２４Ｙ

【作者名】
学校嫌い

【あらすじ】
なずなは渡さん！をモットーに俺ことセナがひだまり荘で賑やかワッショイする話。

5月9日　ずぶ濡れワッショイ！

「ヒロが踏めばいいんじゃね？」

「あら、どうして？」

「いや、この中で一番重いから」

『・・・・・・』

ガン！

「今のはセナが悪い」

そうですか。

今紗英が言った様にまあ、俺が悪いんだろうな・・・ゆの達とみやこも踏みながら笑ってるし。

唐突だが、ここは山吹高校に通う生徒が集まるひだまり荘。

住人は俺含め7人。

1年の乃莉となずな。

乃莉は活発でいつもなずなを引っ張っている。

兄としては助かるな。

これからも頼むぞ？

んで、妹のなずなは引っ込み思案であまり自分から、誰かに関わることは出来ない。
中学でも殆ど俺にくっついていたからな。
まあ、可愛い奴だ。

もし、彼氏なんか連れてきたらそいつはまず半殺しにする。

次は2年のゆのとみやこ。

ゆのも若干なずなに似てるな。
大人しめというかなんというか。
それでも絵に対する態度は真剣で、そのことにかんしては色々と自発的に動いている。

そんなゆのといつもいるのがみやこ。

ひだまり荘の住人の中では多分一番大人びている。

体系的にしろ内面的にしろ。
それに絵の腕も群を抜いているからな。
みやこ以外は内容を理解するのに時間が掛かるが、それでも上手いのは確かだ。

そして飯をよく食う。

最後は俺ことセナ。

ゆの達とは違ってなずな同様普通科に通う2年男子だ。
授業なんかは殆ど聞いていないから、テストなんかは毎回赤点ギリ

ギリだが、取らなきゃいいんだよ。
俺のことはそんなに詳しく言っても意味無いな。
次は3年の紹介といこう。

まずは俺を殴ったヒロ。
ケーキなんかを食うときに一々カロリーを気にする。
そして俺とみやこが体重に関すること（さっきみたいな）等を言うと瞬速の早さで鉄拳が飛んでくる。
あれ、マジで見えないからな？

次に紗英。
美術科に通いながら小説を書いている現役の小説家。
そしてそれを愛読しているのが『紗英ラブ』の・・・誰だっけ？
まあ、いいか。

とまあ、こんな具合で愉快な奴らが集まっているひだまり荘で、今俺たちは庭に集まっている。

何をしているのかと言うと、ヒロがカーテンを洗濯するために（風呂でやれば良かったと思うが）みやこのビニールプールにカーテンをぶっこみ、何故か紗英のカーテンも道連れになり、それをみやことゆのが踏んでいる。

とそこで冒頭の台詞に繋がる。

そして俺が殴られる。←いまここな？

んじゃ、スタート。

「相変わらず早いな・・・達人かなんかかよ？」

「セナくんが悪いんでしょう！」

団子から伸びている髪をふよふよさせながら起こるヒロ。

いつも思うがどうやって動いてるんだ？

「お兄ちゃん、大丈夫？」

我が愛しの妹なずなが心配そうに近づいてくる。

「おお、大丈夫だぞ～。なずなは優しいな～」

「えへへ」

頭を撫でると嬉しそうに微笑むなずな。

本に可愛い奴よ。

とそこで

ぐううう～・・・。

とゆのとみやこの腹が鳴った。

「「仲いい（ですね）な？お前ら（お二人とも）」」

俺となずなの台詞がハモった。

「二人も仲いいじゃない？」

ヒロがからかう様に言ってくる。

まあ、それは流して。

「まだ朝飯も食ってないし、なにか作るか？」

「パンでも軽く焼きましょうか」

「そだな」

というわけでヒロがパンを焼き、ゆのが目玉焼きをつくることになった。

先にヒロの部屋に集まり、その時になずなが自分の部屋からハムを持ってきた。

気の利く妹だ。

と、ここで一応言っておくが、俺となずなの容姿は全く似ていない。唯一似ているのは髪くらいで、それ以外は全くだ。

ん？男と女だから当たり前か。

そうか、というか髪が似ているなら十分似ているな。

すまんな？

んで、身長は俺は１７５？位。

一応な？

少し待っているとゆのが目玉焼きを持ってやってきた。

「ゆの・・・それはなんだ？」

ゆのが持っている皿の上には、黄身が７つの不思議な目玉焼きがあった。

大方全員分を一気に焼いたんだろうが。

で、俺の予想は的中しており、それを見た全員の感想が

『うわぁ・・・なんか気持ち悪い』

だった。

ヒロが焼いたパンになずなが持ってきたハムを乗せ、その上にさらにゆのの目玉焼きをのせて朝食の完成となり、

『いただきま～す』

賑やかな朝食が始まった。

ゆのがみやこのパンを渡すと、みやこはゆのの手のかぶりつき、パンは一瞬でみやこの口の中に消えた。

「もう、みやちゃんたら～」

引き抜かれたゆのの手にはみやこの唾液が付着していたが、ゆのは気にした様子は無い。

確かにいつものことだからな。

「ぱく」

隣でなずながパンを一口。

「美味いか？」

「うん！卵が半熟で美味しい」

「そか。よかったな？」

「うん！」

その後も朝食は賑やかに進み、またカーテンの洗濯に俺たちは戻った。

「ねえ、お兄ちゃん？」

「ん、どうした？」

「お兄ちゃんって好きな人いるの？」

少し困った様な表情をしながらなずなが聞いてきた。

「いや、いないが？それがどうかしたか？」

「ううん・・・それならいいの」

「そうか？」

なんだろうか？

その時、ヒロと紗英を除く全員が安堵の息をついていたことに俺は気付かなかった。

汚れを取る作業が終わり、プールからカーテンを引き出す。
そんな俺の後ろで乃莉とヒロがカーテンを引き上げるのに苦労していた。
その過程で何故かヒロが四つんばいになって落ち込んでいたが。

「ねえ、お兄ちゃん。もうすぐしたら雨が降るから、先に部屋に入れた方がいいと思う」

「そうなのか？それじゃ戻るか。お前ら、雨が降るから部屋入れ」

「え、でも」

なずなが空を見上げる。

確かに晴れてるけどな。

天気はいつ崩れるかわからん。

「いいから、入れって。ずぶ濡れになるぞ？」

ドザーー！！

一気に降ってきやがった。

「・・・・ほれ見ろ」

「あはは」

カーテンは何とか部屋に投げ込んでいたから無事だったが、俺たちは全員ずぶ濡れになった。

部屋に上がって、カーテンをどう干すか悩んでいると、みやこがカーテンを付けた。

これは干しているんじゃなくて、カーテンのいつもの姿だが・・・

まあ、細かいことはいいか。

取りあえずやつことも終わった俺たちは解散した。

ゆの・みやこ・なずなは2階の部屋。

俺・紗英・ヒロ・乃莉は1階の部屋。

ちなみに俺の部屋は３０１号室だ。

「ホント、ほんの些細なことで盛り上がる奴らだよな？」

次はどんな出来事があるのやら。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3124y/

７人目の住人

2011年11月7日08時16分発行